



## お掃除の手間をとらせない、 汚れてもすぐに落ちる新機能付タイル!!

私たち協同組合ケーエスジーは、人にやさしい特殊機能を持つタイルを多くの人に使って頂ける様、ご提案させて頂いている組合です。今回はナノクリーン加工のタイルについて説明させていただきます。

従来の外装床用タイルの汚れは、タイル表面の微細孔に汚れが入り込み、蓄積されることによって起きています。

定期的な清掃を繰り返してもわずかに残る汚れの蓄積は、年月の経過とともに微細孔が入り込んだままとなり、比較的メンテナンスが楽と言われるタイルでも、こうして汚れが落ちづらくなります。

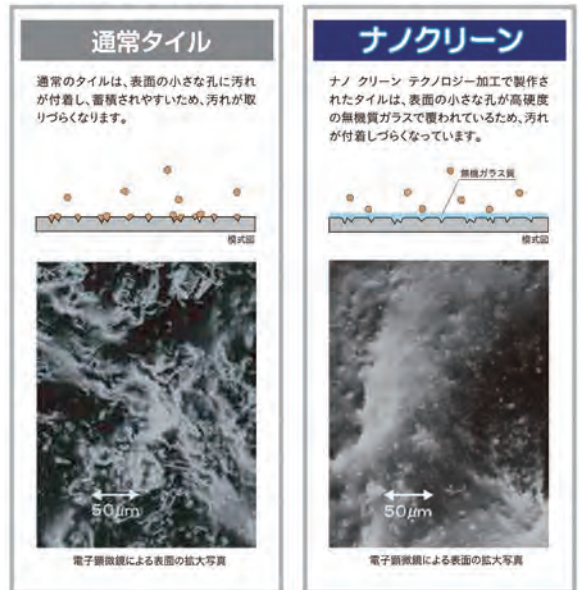
ミノアールの「ナノクリーンテクノロジー加工」は、タイル表面の小さな孔を高硬度の無機質ガラスで覆うために汚れそのものが

付着しづらくなります。

また、「ナノクリーンテクノロジー加工」による無機質ガラスは、モース硬度8と非常に高く、表面に傷がほとんどつきません。そして、タイル表面の耐摩耗性はCLASS4(重歩行用)を誇り、表面の無機質ガラスやゆう薬による色もはがれづらくなっております。

この特徴が今までにない、メンテナンス性を実現し、タイルへの汚れをおさえつつ、清掃のしやすさ、汚れの落ちやすさを可能にしています。新築住宅床タイルとして、公共施設の外装床タイルとして、人が多く動く場所などでより効果を発揮します。

### ●通常タイルと“ナノクリーン”の違い



その他にも機能付きタイルがありますので、皆様に少しでもご紹介できる機会をいただければ幸いです。

お問い合わせを心よりお待ちしております。

建築確認検査、住宅性能評価、

住宅かし保険、構造計算適合性判定、

省エネ適合性判定などの業務を行っています。



一般財団法人 愛知県建築住宅センター



## CONTENTS

法人協定会通信 60

協同組合ケーエスジー 表紙裏

大野 一彦

地域会だより 1

新年あいさつ 2023 2

大瀧 正也・浅井 裕雄・石橋 剛・森 哲哉・内田 実成・森本 雅史

連載【隔月 全6回】

morinosに見る木造建築の設計手法

第5回 -エネルギー設計の勘所- 6

辻 充孝

連載：BIM が切り開く新たな創造性

第3回 ～芦田智之氏インタビュー～ 8

横関 浩

ぎふ木遊館 建物見学会 9

長尾 英樹

建築ウォッチング「空き家再生探訪ツアー」を開催 10

山本 覚康

plustic安藤忠雄講演会 11

岩淵 蓮也・内海 賢人

会員のステージ

JIA愛知後援「ヘリテージマネジメント」勉強会報告 12

川本 直義

天使の森植樹祭 12

西村 和哉

自作自演 253

Dedalo Minosse International Prize 13

田中 義彰

「趣味は？」と聞かれても 13

富田 彰次

連載：コンペ・プロポーザルのありかた ②

シンポジウム「知的生産者の公共調達の法整備」レポート 14

恒川 和久

新年広告 15

保存情報 第252回

データ発掘：入鹿池の堤と杵 16

野々川 光昭

編集後記 16

江川 静男・黒川 喜洋彦

寄稿

山本理顕氏講演会レポート 17

諸江 一紀

## 地域会だより 今後の予定

### ■JIA東海支部

・1/20 第7回支部役員会(WEB同時開催)

### ■JIA静岡地域会

・1/12 静岡地域会役員会の開催(WEB同時開催)

### ■JIA愛知地域会

・1/27 第8回役員会(WEB併用)

・1/27 商品PR展示会・新年会

### ■JIA岐阜地域会

・1/19 第9回役員会 18:30～20:30

### ■JIA三重地域会

・1/18 三重短大 出前授業

・1/31 環境セミナー「環境建築見学会」名古屋市内 建物見学

## 表紙 街で見かけた風景 ⑩ →「かえるのちから」

明けましておめでとうございます。

日本の古建築には「臺股」という部材がある。ただ「支える」だけでなく「生命の宿った美しさを持ち、できれば筋肉を使って持ち上げて欲しい」という先人の願いを感じる。

写真：奈良十輪院本堂 鎌倉時代 国宝



吉元 学 (JIA愛知)

ワークキューブ/愛知淑徳大学

## ◆今年の東海支部にむけて

皆様、新年あけましておめでとうございます。  
日頃よりJIA東海支部の活動にご協力いただきありがとうございます。  
本年もどうぞ宜しく願い致します。

●ここ数年、社会生活に多大な影響をもたらしている新型コロナウイルス感染の脅威につきましては、この原稿を執筆している11月中旬において全国で10万人を超え、第8波の到来を告げています。情報によれば新年早々にピークが来るとの予測があります。皆さん体調はいかがでしょう？特効薬の開発もはっきりせず、行動制限はしないとしている現在、自分で身を守るしか無いのかもしれない。BA-5対応のワクチン接種をお勧め致します。

●JIAでは今年度より佐藤尚巳新会長を迎え、「頼りになる建築家、頼りになるJIA」をスローガンに掲げ、若い建築家を世に出し彼らをサポートすること、また建築家という職業を世の中から頼りにされるプロフェッショナルとして、世の中に認識されるようにすること等を柱にしていきたいと発言されています。

また、近江商人の「客良し、自分良し、世間良し」の三方良しの思想について、「世間良し」も常に考えながら仕事をしなければいけない、この多様性を含んだ活動により価値が生まれ、信頼を得ることが出来る。これこそ建築家の公益性だとおっしゃっています。

分かりやすい言葉を使い、考え方を示される会長が就任されたこと喜んでおりますが、今後JIAには、はっきりさせなければいけない事が山積みになっています。佐藤会長がリーダーシップを発揮されることを期待しております。

●そのひとつに資格制度(登録建築家)の事があります。昨年末より本部理事懇談会が開催されており、ある一定の期間で本部理事の見解を得ようとしております。

ここからは、私の個人的な意見として聞いてください。JIA正会員の入会資格は、「建築家憲章」「倫理規程」「行動規範」等によりメンバーシップとして決められています。

これに対し「職能資格」として2003年にスタートしたのが建築家資格制度(登録建築家)であり、それは自己研鑽を含めたライセンスであります。段階を経て最終的に建築家資格を国家資格にする事を建築士会連合会と共に進めてまいりましたが、現在、目新しい進捗はなく、会員数、登録建築家数共に減少しています。

現在本部理事の一部からは、建築家資格制度(登録建築家)を取りやめにしたらどうかとの意見が出る始末となっています。

私は、「JIA会員=登録建築家」が進むべき道ではないかと思っています。「正会員と登録建築家の資格要件の違い」他、検討しなければならぬ事がありますが、先人や委員会が積み上げてきた「建築家資格制度」です。簡単に取りやめるのではなく、形を変え、JIAの血や肉となるような方法があるに違いないと思っています。

この件について「おまえは違う」的な皆様の積極的な意見をお待ちしております。

●会員減少につきましては、原因は他にあるように思います。それは「会員のメリットが無い」事だと思えます。公益性も重要な事ですが、会員特典のような、会員のみの企画も大切だと思えます。30代40代を引上げ、意見を聞く事は佐藤会長がおっしゃることと同じです。これは今後の重要な課題だと思えます。

●さて、支部事業についてですが、今年度は「東海卒業設計コンクール」「東海住宅建築賞」「東海支部設計競技」「雑誌ARCHITECT発行」各地域会事業等が実施されています。ほぼ、コロナ前の状態に戻って来ています。集客等まだまだですが、頑張って参りましょう。

●また、今年の秋には「JIA建築家大会」が常滑で開催されます。

### 「(仮称) JIA建築家大会 常滑」

タイトル:「環る」(まわる・めぐル・よみがえル)

日時:令和5年11月9日(木)・10日(金)・11日(土)

(エキスカージョン)

場所:常滑市文化会館(予定)・INAXライブミュージアム(予定)

現在、日本の地方都市において、過去に産業・観光等において一世を風靡した街が、経済悪化・人口流出により困難や脅威にさらされている状況があります。その中で広い意味でのレジリエンス(うまく適応し、回復させる)まちづくりとは何なのか?

回復だけではなくよりアップサイクルさせることは出来るのか?常滑という街を取り上げ、多くの建築家に実際に街を歩いてもらい、それを問うことも念頭に置いた大会にして参りたいと思っています。現在、小田大会委員長、浅井実行委員長のもと、実行委員会が立ち上がり、組み立てをしております。今後皆さんには、役割分担をしていただき、東海支部全体で盛り上げて参りたいと思います。

●このように今年の東海支部はたいへんな事がいろいろあります。経験不足の支部長であります。変わらずフットワーク良く、支部内を駆け巡りたいと思っていますので、皆様、ご協力を宜しくお願い致します。



JIA東海支部支部長  
大瀧 正也

# 新年あいさつ

## ◆レジリエンス・回復力

あけましておめでとうございます  
健康に過ごされているでしょうか。

### 2023建築家大会@常滑 「環ル」

今年は建築家大会を常滑で開催します。テーマは「環ル」読み方は、いろいろ。

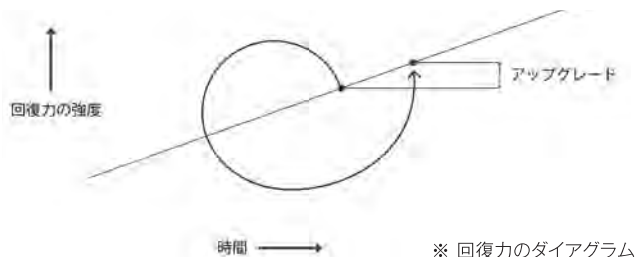
めぐる。まわる。よみがえる。

同じ意味で「レジリエンス」があります。

復元力とか回復力などと訳します。

元の状態に戻すことですが、「回復」という行為は、プラスに転じるなにかが必要。

元から回復を経て現在に至る場合。その回復には、アップグレードによって元より上のレベルにできることが、回復力だと思う。



### 終わらないコロナ禍と愚行

この原稿を書いているときは第8波の始まり。年末にかけてピークになっているだろう。しかし、人々は今までより落ち着いて過ごしているように思う。このマスク生活、そろそろ終わりにしたいと思うのは、私だけだろうか。受け入れながら、普通の生活に戻っていきと思いはじめた。

ウクライナではロシアの蛮行は終わっていないであろう。ヒトは進化していると思った。前の大戦から80年を超えているのに、同じこと愚行がおこっているのが不思議でならない。これだけ情報共有や経済の依存もグローバルに行われていて、あんな理由で起こるなんて。

ウクライナの街をGoogleでみてみれば、とても美しい街だ。今のニュース映像を見ると、復興の過程で、建築は何ができるのだろうかと思う。

もうじき1年、一刻も早く終わること願う。

### 建築家と資格制度

理事懇談会において、建築家資格制度を話し合っている。この話題は、会員それぞれ意見があり一晩でも話し合うような事件になってしまう。職能と制度と思いと、大変だ。

現在、私は愛知建築士会の副会長でもある。士会では、「信頼される建築士」として、市民へのメッセージをどのようにしていくかなどを検討しているところです。

JIA佐藤会長は「たよれる建築家」をテーマに職能を考えている。どちらも、内側の立場でなく、外からの目線で考えようと言うことだ。

人口減少、会員減少の今だから、素直に誰のための建築家なのかを考えて、建築家資格制度を考えたいと思う。なにかの修正は必要になるかもしれないが、それにより、後退ではなく、将来プラスになるコトを見出したい。そして、この懇談会では、理事会としての統一意見をまとめたいと強く思っている。

### 回復力

常滑は日本の六古窯の1つとして1000年以上の焼き物の歴史を持つ。近代は工業的窯業として栄えた。その当時は、街全体が土管工場となり活気にあふれていた。産業構造の変化にともなって、焼き物の街の風景の一つ、レンガの煙突などは毎年解体されていく。工場敷地内の生産施設と考えればドラスティックに変化していくのは当たり前なのかもしれない。

全国大会の候補地として、常滑を推していた時、行政サイドとして旧青木製陶所を見てほしいという依頼があった。その時、常滑の陶芸作家の作品展示を企画されていた。常滑には作家も多く、全国大会でも会場にしたい、「陶芸研究所」は毎年5名の陶芸家を育成している。旧青木製陶所の縁で、陶芸作家と交流することになるのだが、常滑に移住して作家活動しているひとはおおい。常滑の古民家にガス釜や電気の窯を置いて子育てと作家活動をしている。暮らしと作家が一体の風景は常滑を体現している。



※ 陶芸家のアトリエの風景

だから、街のことについて熱く語ってくれる。

街に対して、主体的に考える個人はこの街に多く存在している。きっと「回復力のある街」である。

街の魅力の一つに、時間の蓄積がある。積み上がるほど魅力は多くプラスは時間の蓄積かもしれない。

今年は忙しくなりそう。全国大会の活動が皆さまのプラスになる祈願します。

JIA本部理事  
浅井 裕雄



# JIA2023 新年あいさつ

## 建築家にとって魅力的な活動を

新年あけましておめでとうございます。本年もどうぞよろしくお願いいたします。

今年度より静岡地域会長となり半年が過ぎました。この原稿を書いているのは12月ですが、今月、ようやく第1回目の事業が行われる予定です。

年頭のあいさつでは今年の抱負のようなことを書かなければならないのですが、地域会活動が活発とも言えず、地域会長としてのスタートダッシュは失敗気味であります。そんな中、何を書こうかと考えあぐねていたところ、4年前にも新年あいさつを書いたことを思い出しました。4年前は支部幹事、地域会運営局長1年目でした。その原稿を振り返ると大きくふたつの課題が書いてあります。ひとつは静岡地域会の運営費が毎年赤字であるということ、赤字の要因のひとつが活動費収入の減少によるもの

で、ふたつ目の課題ともつながるのですが、会員数の増強、とくに若い世代の仲間を増やすことが必要であるということが書いてありました。

ひとつ目の課題について今は解決しています。事務局員の退職に伴い事務局員が昨年度から不在となったため、活動費にあてられる予算が増えたということがあります。裏を返せば、新たに事務局員を雇用する余裕がなく、地域会運営のための事務的な作業を役員の間で手分けをしながらどうにかやっているという状況です。コロナで従来の活動が滞ったことで活動費が余ってしまうということも重なりました。少なくとも活動費が足りないという状況は抜け出せています。

ふたつ目の課題、会員数ですが、4年前は正会員・準会員あわせて62名だったの

が、現在は47名となっています。こうして改めて確認してみると厳しい現実を目の当たりにするのですが、会員数を増やすには、建築家にとって魅力的な活動を地道に行って、それを外部にも発信するということしかないと思います。

地域会長としてのスタートダッシュには失敗していますが、サッカーワールドカップ日本代表のドイツ戦やスペイン戦のように後半で逆転できるよう、あと1年と少しの期間、もう少しアクセルを踏み込んで、静岡地域会を盛り上げられるよう頑張りたいと思います。



JIA静岡地域会長  
石橋 剛

## 様々な交流で意見交換の機会を

新年あけましておめでとうございます。日頃よりJIAの活動にご理解、ご協力をいただきありがとうございます。本年もよろしくよろしくお願いいたします。

地域会長を拝命して約半年が過ぎました。新型コロナウイルスの蔓延から3年が経過しましたが、未だ収束する気配がありません。この原稿を書いている11月末には、第8派が押し寄せています。引き続き状況を注視し、感染対策を講じながら活動を推進したいと思います。

対面活動としては、3年ぶりに総会、暑気払い、CPD研修会を再開し、名古屋大学との共催で山本理顕氏をお招きして講演会を行いました。「JIA建築家大会2022沖縄」のシンポジウムでも言及されましたが、人と人が会うことで思いがけない発展があり、未来に繋がる力となることを再確認しました。

就任にあたり、①地域に根差した公益活動 ②地域会のアップデート ③未来に責任ある活動の3つを掲げました。①としては、「お店をつくろう!～小さなまちづくりプロジェクト～」建築ワークショップ@豊橋、新たな取組となった愛知県下の小学生を対象にした「一寸格子ワークショップ」、猪高小学校での建築教室、「建築家+」の発行、名古屋市立大学での出前授業「建築家の仕事」、一般市民に向けた建築相談などがあります。②は、オンラインによる研修や交流、HPによる情報発信、委員会構成の見直しなど。③は、設計者選定に関する行政サポート、「天使の森プロジェクト」への参加、建築家資格制度についての議論があります。また、SDGsの目標12「つくる責任つかう責任」、「カーボン・ニュートラル」に関しては避けて通ることができません。持続す

る社会に向けて業界全体として取組む必要があります。そのために、会員と法人協会の意見交換を心掛けたいと思います。

今年は「JIA建築家大会2023東海」が11月9日-11日に常滑で行われます。沖縄大会のPRで弾みをつけ、鋭意準備を進めております。これを機に、会員に止まらず多くの人を巻き込みながら、地域の課題に対し、建築家の取り組みを示すことができればと思います。今年は忙しい年になりそうです。皆様の積極的な参加とご協力をお願いいたします。



JIA愛知地域会長  
森 哲哉

## 会員皆様のJIA活動の充実を目指して

新年あけましておめでとうございます。地域会長を仰せつかり9か月が経過しました。今年度は、4月の総会から始まり、4つの事業計画を掲げ活動をしています。

8月には、「ぎふ20×20コミュニケーション」を開催しました。昨年からの事業で、ものづくりをキーワードに靴職人、女性現場監督、建築家、学生の方々に仕事の考え方や趣味等を20枚のスライドを20秒毎にプレゼンして頂きました。オーディエンスからの質疑応答も加え、お互いの個性・アイデアの気づきや発見、自己研鑽の場を、岐阜地域会としてコーディネートできた事業でした。会場設営も、コロナ対策を役員会で様々な意見交換し、設営できました。

11月には、「ぎふ木遊館 見学会」を開催しました。この事業は、コロナウィルス感染拡大のため2年延期になった事業でした

が、無事に開催することができました。設営も役員会でいろいろ意見交換し結果、当初の見学方法より変更し貸し切りスタイルとし、建物説明は、会員の山田さんに担当して頂き、参加者の方々から活発な質問もありました。その他、岐阜の県産材の話や補助金の情報提供も含め、有意義な事業になりました。11、12月には、愛知地域会の事業委員会の「一寸格子WS」事業にも参加しました。残り、1つの事業を3月に残し、毎月の役員会で事業成功に向け会議をしています。

今年度のARCHITECTに地域会長就任にあたってというコーナーで、「会員拡大と会員力向上」と書きました。一昨年・昨年と岐阜地域会に新しいメンバーが入会して頂きました。今年もさらに会員拡大に力を入れ、共に活動できる仲間を増やしたいと

思います。また毎月の役員会では、岐阜地域会の会員皆様に、伸び伸びと楽しい事業ができる様に、役員会の運営を務めたいと思います。合わせて東海支部の事業内容や理事会の内容の落とし込みを行い情報共有し、支部活動の理解も増えるよう、役員会を運営したいと思います。

本年もどうぞよろしくお祈りします。



JIA岐阜地域会長  
内田 実成

## 「建築のはなし」をしませんか

あけましておめでとうございます。本年もよろしくお祈り申し上げます。

みなさん、「建築のはなし」をしませんか。

先日、三重県内の若手建築家にJIA入会の勧誘とあわせて自邸を見学させていただきました。入会の承諾はすぐにはもらえなかったものの、お礼メールに「また、建築のはなしをしたいですね」とありました…。

三重地域会では今年度は本物にふれることが大切だと考え、まず松隈章氏から総会で記念講演会を受けた後、6/18聴竹居の見学会を行い案内して頂きました。さらに会員研修会を年間のシリーズとしてテーマを絞り、東海で活躍されている方々にお話を伺うようにしました。(8/5第1回:謡口志保氏、10/7第2回:山上健氏、12/9第3回:向口武志氏、3/10第4回:富田崇氏予定)そして先日、大室佑介さんをゲストに迎え

12/10三重建築学生合同課題発表会2022を開催しました。こうした本物にふれたあとに行われる懇親会では「建築のはなし」がはずむ会員たちの様子がみられました。会員も建築のはなしができる場所、テーマを求めているのがわかりました。また、今年度から例会の会長挨拶時に話題提供として、私が訪れた建築・場所の写真1枚を見て頂くことにしました。報告事項が多い中、少しでも建築に触れる時間ができればとの試みです。

両親が設計事務所をしていたため、子供のころから食卓でも旅行先でも「建築のはなし」ばかり。現在も父弟と事務所をしているためどちらかというと「建築のはなし」には食傷気味。他の分野の話をしたという気持ちもありましたが、新年にあたり、初心に帰ります。

建築家が研鑽するために集まった仲間同士、建築で満足する場を提供することが地域会の進むべき道だと考えます。私たちは「建築のはなし」をすることからはじめます。その先に「建築物の質の向上と建築文化の創造・発展に貢献すること」があると信じて…。

みなさん、「建築のはなし」をしませんか。私たちがその場所・テーマを提供いたします。それが三重地域会の、そしてわたしの今年目標です。



JIA三重地域会長  
森本 雅史

# エネルギー設計の勘所

## 1. はじめに

エコ建築には、自然素材を多く用いて製造・廃棄時のエネルギーが少ない「材料のエコ建築」と、省エネ性能を高め運用時のエネルギーを極力削減した「運用のエコ建築」に大きく分かれる。

建物のライフサイクルを通して見ると、一般的な事務所建築(50年間運用)のエネルギーは、製造・廃棄時で30%程度、運用時で70%程度という試算がある。いくら自然素材で作っても運用時のエコを疎かにすると、毎日の電気やガスが積み上がり結局はエネルギーをたくさん使うことになる。

つまり、運用時の省エネを実現し、かつ素材の選定にも気を配る必要がある。今回は、運用時の省エネ設計と実測について解説する。

## 2. エネルギー設計の勘所

運用時の省エネを考えるにあたっては勘所が大切である。計画段階で、用途別のエネルギーの多寡がわかれば、設計段階の検討が容易になる。

例えば温暖地の住宅では給湯が一番エネルギーを使用するが、非住宅建築物では建物用途によって大きく異なる。

図1は床面積1㎡あたりのエネルギー消費目安である。上2段の住宅(全館空調と間歇空調)と比較すると、同じ床面積でも非住宅建築物は多くのエネルギーを使用することがわかる。

morinosは学校用途が目安となる。非住

宅建築物の中では少な目であるが空調が最も多く半分程度を占める。次いで照明、その他(OA機器など)が続く。換気と給湯は少ない。つまり設計においては空調と照明の省エネ対策が重要なのである。

## 3. エネルギー計算

morinosで行った主な省エネ対策は、断熱や日射熱制御を向上させ、薪ストーブと高効率エアコンによる「空調エネルギー」の削減と、昼光利用を積極的に行い必要な場合はLED照明で補完する「照明エネルギー」の削減である。

これを建築研究所の「エネルギー消費性能計算プログラム(非住宅版) Ver.3.3.1」を用いてエネルギー消費予測を行った。(図2)

左が外皮性能、右がエネルギー消費予測である。右上段がmorinosの設計値、下段が省エネルギー基準値(同種の建築物の一般的な性能)である。

設計値は46.1GJ/年であり、光熱費に変換すると約13万円/年である。(電気単価が27円/kWhの場合)一方の省エネ基準値は143.2GJ/年で、光熱費が約40万円/年である。建物の性能向上により年間27万円の削減効果となり、10年間で270万円、50年間で1,350万円の差になる。

ただし、この計算結果にはその他エネルギーが含まれていないため、一般的な学校用途のその他エネルギーを追加すると表のように、省エネ基準値の半分以下の設計値である。

表 morinosの設計予測値と省エネ基準値

	設計予測値	省エネ基準値
暖房エネルギー	22.26 GJ	126.97 GJ
冷房エネルギー	14.16 GJ	
換気エネルギー	0.78 GJ	1.97 GJ
照明エネルギー	8.90 GJ	14.26 GJ
その他エネルギー	26.12 GJ	26.12 GJ
合計	72.22 GJ	169.32 GJ

## 4. 空調設備の計画

設計値の半分以上を占める空調エネルギーを削減するには、3つの方法がある。つまり①暖冷房負荷の削減、②運用の工夫、③高性能な暖冷房機器の設置である。

「暖冷房負荷の削減」のキモはこの連載ですでに紹介した外皮性能の向上である。

「運用の工夫」は、活動プログラムとも連携しながら考える必要がある。季節の良い時は開口部を開け放ち、外気を取り込んだり、日射遮蔽をしたりと、その時々に合わせて運用である。

運用の工夫で対処しきれない厳しい気候条件の時は、「高性能な暖冷房機器」の出番である。

morinosには薪ストーブとエアコンが導入されている。

バイオマス利用の薪ストーブは、敷地内で取れる針葉樹にも対応したものである。morinosの外皮性能から外気温が0℃の時、室温を20℃に保つには7,400W程度の暖房負荷が発生するが、導入した薪ストーブは最大で10,000W程度の出力があり、上手く熱が廻れば1台で賄える能力がある。当然、薪ストーブ近くは暖かく、離れたと寒くなる。この温度ムラを弱点ととらえる

図1 温暖地における建物用途別、床面積1㎡あたりのエネルギー消費量

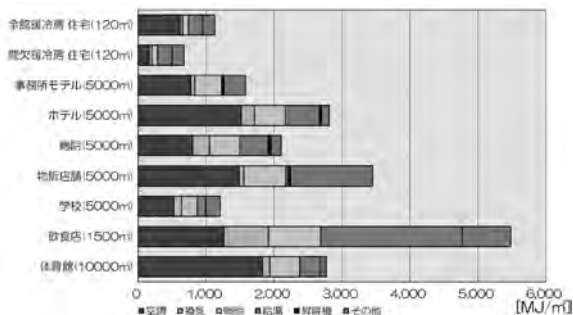


図2 morinosのエネルギー計算結果(その他エネルギー除く)

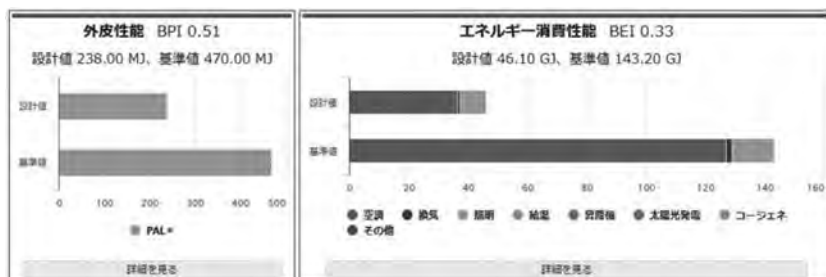




図3 morinosに設置された薪ストーブ AGNI-CC



図4 床下に半分埋め込まれた床置きエアコン

か、ちょうどいい温度域を探せる面白さととらえるかは利用者の判断である。

エアコンは一般的な壁掛けエアコン1台と床に半分埋め込んだ床置きエアコン2台である。床置きエアコンは、収納下部に半分埋め込む形で設置した。冬は、床下空間と、床上に暖気を出し、夏は床上のみに冷気を出す計画である。

床下暖房は、活動スタイルを考慮してのものである。環境教育施設の性質上、冬でも扉を開け放ち開放的に使うことも想定される。そのため、室内をいくら暖房しても扉の開け閉めによってすぐに霧散してしまう。

そこで床下空間に暖気を留め、床の表面温度を維持することで、体感温度(特に床に近い子供たち)の確保を狙った。

一方で夏は快晴時の日中に10,000W近い熱が室内に入ってくるため、この熱を取り除く必要がある。壁掛けエアコンの最大冷房能力が5,700W、床置きエアコンが5,600W×2台のため能力的にもゆとりがある。

また、冷気は比重が重たく床付近に溜まりやすいため、暖房より効果を実感しやすい。

morinosのような気積の大きい空間は、空間全体を空調するというより、居住域を適切に空調するという考え方が合っている。

森林文化アカデミー校内で得られるエネルギー源は、薪に代表されるバイオマスと太陽光発電の電力のみ。これら2つのエネルギー源を活用した薪ストーブとエアコン、2種類の空調機器を、運用状況に合わせて利用者が上手く運転できることを期待している。

## 5. エネルギー消費量の実測

さて、大切なのは設計評価ではなく、実際の運用はどうだったかである。分電盤にクランプ式電力計を設置しての1年間の実績値を取得した。

実測から得られた1年間の電力使用量は4,604 kWh、1次エネルギー消費量に換算すると44,937MJ(44.94GJ)である。

これを、1年間のエネルギー消費量を季節や時間の変動から用途別に推計した。

図5下部のセキュリティとOA機器等が比較的大きな割合を占めている。夏期に目立つのは冷房エネルギーである。冬期の暖房エネルギーはまばらでそれほど大きくなく、日射熱と薪ストーブが効果を発揮していると考えられる。

実績値、設計値、省エネ基準値(標準値)と比較してみると、省エネ基準値に比べ、設計段階で57%の削減予測に対して、実績はさらに少なく73%の削減になった。

特に省エネ基準値の75%を占める空調エネルギーが、圧倒的に少なくなっている。これは、断熱強化と日射の取り込みの影響が大きい。

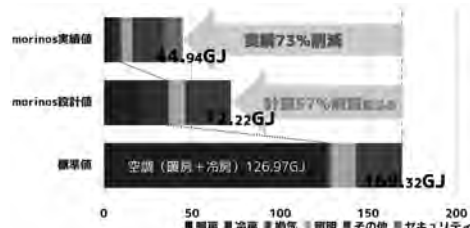


図6 実績値、設計値、省エネ基準値(標準値)の比較(標準値のみ暖房と冷房は合同)

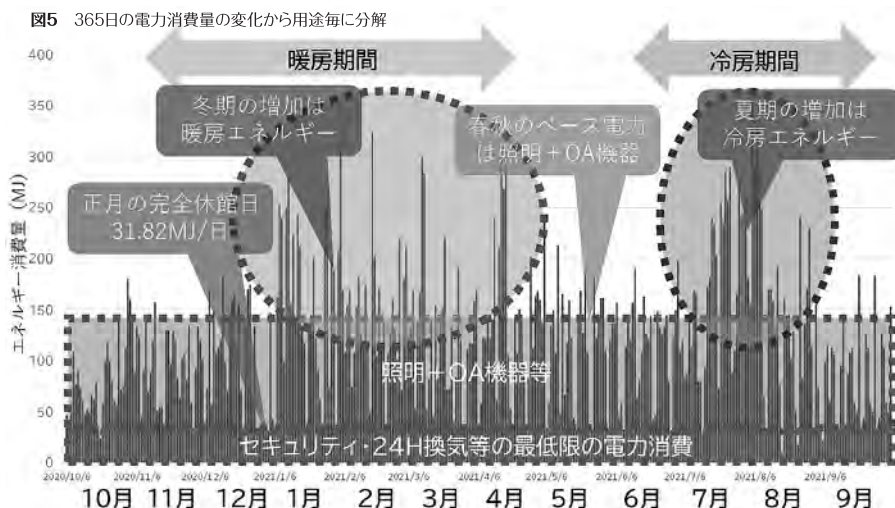
## 6. おわりに

今回はエネルギー設計の勘所と実測について解説した。建物は一度建設すると50年から100年、或いはそれ以上その場所に存在し、常にエネルギーを消費していく。設計段階でしっかりとエネルギー設計をしておくことで、9割弱を輸入に頼っている我が国の不安定なエネルギー供給から解放され、安心して建物を未来に引き渡すことができると期待している。

岐阜県立森林文化アカデミー 准教授 辻 充孝  
morinosのより詳しい内容は建築秘話  
(<https://www.forest.ac.jp/facilities/morinos/>)を参考



岐阜県立森林文化アカデミー  
教授 辻 充孝





## ～ 芦田智之氏インタビュー ～

日本のBIM建築設計を牽引してきた日建設計 芦田 智之氏にBIMと創造性についてインタビューを行いました。その内容をお伝えします。



日建設計 芦田 智之 Ashida Tomoyuki © 日建設計

横関:お忙しいところありがとうございます。本日はよろしくお願ひいたします。

芦田:よろしくお願ひします。

横関:BIMがようやく小中規模の事務所に普及されるようになってきたのですが、効率的に設計ができるとか、手戻りが少ないとかだけでなく、創造性のところにどう関わるのかというところをお聞きしたいと思います。たまたま東京で見かけた建物がとても面白くてそれをSNSにアップしたことが今回のインタビューに繋がりました。まずは、そのビルのことから教えてください。

芦田:麻布十番のあのビル、実は遠くからあまり見えないんですね。そして遠くからはあまり目立たない。完成は5～6年前のものになります。

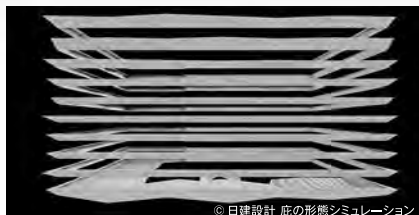


横関:非常に良くできたデザインですね。窓はきちっとした水平連続窓になっていますが、壁部分が入り出しているだけで豊かな表情が作られている。見た目は複雑に見えるけれど操作はシンプル。1日の間でも陰影で表情が大きく変わる。

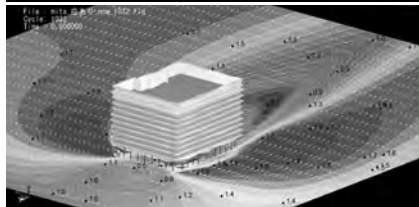
芦田:そうです。実はこの庇、基本的に下向きになっているじゃないですか。なので周囲の光や空の色を写して刻々と色が変わるのです。

横関:もしかしてシミュレーションがされているのですか？

芦田:しています。していますけれども、そのような効果というよりも、反射光がどこへ行くかみたいな。ビルは、やはりどうしても、光害が生じる可能性がある。特にあのように複雑な面をしていると。まあ経験上、下を向いているのはあまり悪さをしない。なのでどちらかというと上面ですね。上面の光がどこへ行くのか。



© 日建設計 庇の形態シミュレーション



© 日建設計 風の流れのシミュレーション

横関:どのように可視化したのでしょうか？

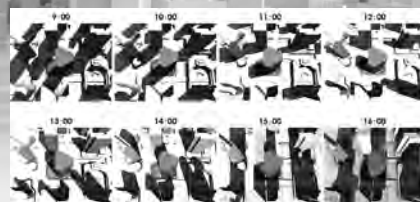
芦田:比較的昔からあるんですけど、日影計算の逆なので、その面の光がどこへ到達するかは時刻日影と同じように出せるんです。

横関:なるほど。

芦田:新宿の三角広場のガラスでもいろいろ検証しました。



あれだけガラスを使うと、太陽の光が反射してあちこちで飛ぶので、周りのビルを全部入力して計算させたわけです。そうしたら自分自身の影になったりとか、周りのビルの陰に入るとか。そもそもガラスの屋根なので、反射しない時刻ってあるんです。それでどう光が到達するかシミュレーションを行いました。

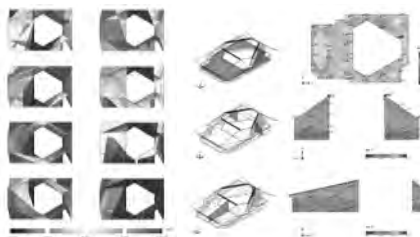


© 日建設計 日影シミュレーション

これは対策をするというよりは、どこに問題が出そうか把握し、クライアントに説明するためのものになります。あとここは、ロールスクリーンで日射遮蔽をするのですが、そのタイムスケジュールであるとか、どのゾーンを閉めるか予測するのにシミュレーションをしました。全部閉めればいいんですけど、要望としては、とにかく空が見えるようにしたいわけです。ですので遮蔽する範囲と時間は、もうぎりぎり詰めています。

横関:そういうシミュレーションというのは、コンピュータが自動で全部やってしまうのですか。それとも人間が、何月何日はどんな感じといった具合に指定しておくのでしょうか。

芦田:任意に指定すれば、その時刻のシミュレーションはできます。あとは設備負荷のための、累積日射量把握のため晴天曇天をどれだけ加味するかで決まってきます。



© 日建設計 日射解析

© 日建設計 温度シミュレーション

横関:なるほど。ありがとうございます。では、本日の本題に入りたいと思います。今日は大きく4つのことをお聞きしたいと思います。まずは、BIMが、建築に何をもたらしたのか。次がBIMが建築をどう進化させるのか。そして創造性をどう生み出していくのか。最後が、それをどう社会と接続させるのか。

最初の1つ目。もう10年以上前ですが、日建設計がBIMを導入して、一体建築に何をもたらしたのでしょうか。

1、BIMが建築に何をもたらしたのか。

インタビューの続きは、以下のアドレスからご確認いただけます。



<https://flowworks.jp/bim-creativity-3/>

横関 浩 (JIA愛知)  
スタンスアーキテツ  
フローワークス



## ぎふ木遊館 建物見学会

3年前から計画していたぎふ木遊館の見学会ですが、コロナ禍で2年間開催されず、ようやく開催となりました。主催者の内田岐阜地域会会長が挨拶をされ、見学会が開会されました。大瀧支部長もご参加のもと、愛知地域会、三重地域会、静岡地域会から大勢のご参加を頂きました。

趣旨説明役を岐阜地域会の山田尚紀さん(ぎふ木遊館設計者)から建物の説明がされ、岐阜県の職員さん2名の方々からも木についてのレクチャーがあり、岐阜県産材を今後積極的に使用していく上でのアピールポイントなどをご説明頂きました。

見学会最中は、特に山田さんからの建物説明で、木の力強さの表現方法としての梁の組み方について力のこもった説明があり、天井の構造現しの壮観な感じがこの建物の空間づくりに於いて岐阜県産材の持つ力強さと柔ら

かさ、匂いと建築学な構造を解いていく中で、意匠的な見せ方を考え抜いたプロ魂との融合で素敵な空間が広がっていたのを肌で感じる事が出来ました。参加者から山田さんに専門的な目線での質問が沢山あり、設計者としての視点で細部まで考えられているところについて、改めて納得されたりし、普段めったに見れない大規模木造建築物に対する知識欲求をかり立てられている参加者の満足感を感じられました。又同時に岐阜県の行政へのJIA岐阜地域会のアピールもでき、行政を巻き込んでの事業は、とても意味のある事であることも再認識しました。

私的な視点での建物への感想は、外観からの印象は軒に梁格子組した構造体の中から力強く突き出ている事が内外の一体感を醸し出して、設計者さんが拘った県産材で純粋に組んだ梁格子組の在り方について見事だと思

ました。内部空間としても床から壁までが天井の圧倒的な存在感に包まれていて一見見上げないとわからない木組みの存在感がここまで空間を左右することに改めて驚かされました。

最後にご多用中にも関わらず、遠方よりご参加頂いた皆さま方に心よりお礼と感謝を申し上げます!又岐阜地域会一同JIAの窓(見学会)を行っていく事にゆるぎない決意を再確認できましたので、これからも積極的にこのような見学会を行っていく所存です。



長尾 英樹 (JIA岐阜)  
Meet's設計工房



## 建築ウォッチング「空き家再生探訪ツアー」を開催

令和4年11月19日(土) JIA三重地域会主催の建築ウォッチングが開催された。三重地域会にとっては毎年恒例の行事で、今回は「空き家再生探訪ツアー」がテーマ。行先は伊勢神宮外宮の門前町である山田地区、その後、場所を移動し、河崎地区の町並みと保存再生建物を見学するという内容だった。

当日は町並みを見て歩くには最良の天気。コロナ感染症対策により参加定員を20名と限定していたが、他県からの参加も含め、ちょうど20名の参加者となった。

JR伊勢市駅前に集合後、午前10時から外宮周辺の散策を開始。今回、見学地の案内役として伊勢の歴史や町並み保全等に係わり活動されている三重地域会の高橋徹氏が案内役として参加、見学地各所で説明をして頂くというスタイルだった。

最初の目的地は『旧山田郵便局電話分室』。1923年(大正12年)に建てられた建物だが、現在はレストラン・ギャラリー・ショップとして利用されている。軒先にそりが付けられた独特な形状の赤い瓦屋根が特徴的な建物。今回、建物の一部を使って営業しているフランス料理店ボンヴィヴァンのオーナーの御厚意により内部を見学させて頂き、お話を聞く事が出来た。ここ数年はコロナ感染症の影響により来客数が伸び悩んでいて、試行錯誤しながら営業を続けているという事。こうした苦勞を乗り越え建物を使い続ける経営者があるからこそ、時代を経た建物が色褪せる事なく生き続ける事が出来るのだと実感した。

その後『式年遷宮記念 せんぐう館』に移動、展示されている数々の神宮式年遷宮の情報を見て、伊勢神宮と共にある地域の歴史等について理解を深めた。



続いて訪れた『旧御師丸岡宗大夫邸』では国の登録有形文化財に登録されている主屋、長屋門と築地塀を見学(これらの建物は慶長年間築造のもの)し、貴重な歴史遺産と、伊勢講を組織して「伊勢参り」の仕掛け人として活躍し、山田地区の自治を担った御師の歴史的偉業を学んだ。

午後からは河崎地区へと移動し、いくつかの空き家再生の実例を見学。築100年程となる商家の邸宅を改修し、ゲストハウスを営む『紬舎』ではオーナーがゲストハウス運営の難しさや楽しさを参加者に話してくれた。

ゲストハウスも例にもれず、ここ数年はコロナ感染症の影響が経営に大きく影を落としていた。それでも、来客が有る限り時間刻みで切り盛りし、忙しい日常を過ごしているという事。「仕事と地域への愛がなければ出来ません。」と語るオーナーの言葉がとても印象的だった。その後は時間をかけて河崎地区を散策し、旧家屋を再利用したレストラン、学習塾、居酒屋や古書店、雑貨ショップなど町並みの中に点在する様々な活用事例を見学した。

最後に『伊勢河崎商人館』を訪問。600坪もの敷地内にある江戸、明治時代築の町家と蔵群を見学。裏千家流の茶室や館内の展示物からは、当時の商家の繁栄ぶりと地域に及ぼした影響力の大きさを理解することが出来た。

見学後は、交流会と称し参加者全員が空き

家再生・まちづくりについての意見交換を行った。その中で話された高橋氏の町並み保全に対する取り組みは、非常に興味深い内容だった。町並み保全を進めるうえで必要な制度の整備と、それに伴う行政との協力と対立。土蔵(河崎の景観を印象付ける大きな要素となっている)を保存活用するために設けられた「伊勢河崎蔵バンクの会」では賃貸、賃借人のマッチングの難しさ等。

「河崎エリアは伊勢中心街に近く、観光拠点としては便利な立地、更には中心街近隣にも関わらず、静かで隠れ処的な雰囲気を漂わせる落ち着いた場所だ。場所としてのポテンシャルは非常に高い地区だが、それでも古い建物の保存、活用に注力しなければ少しずつ建物は解体され、町の景観を壊してしまう。」と高橋氏は語る。

全国的に空き家対策が課題となっている今、建物や町並みの保存再生・利活用の取り組みを学ぶ事はとても意義深い事。今回の建築ウォッチングは参加者全員にとって、貴重な経験であったに違いないと感じている。

山本 覚康 (JIA三重)

山本一級建築士事務所



# plustic 安藤忠雄講演会

去る11月25日、名古屋大学豊田講堂で開催したplustic安藤忠雄講演会は大盛況のうちに無事終了しました。

plusticは、東海圏を中心に建築学生や建築に携わる方々に向けた講演会を企画している学生団体です。第8回目となる今回は愛知工業大学安井秀夫研究室・名古屋大学恒川和久研究室の学生が主催し、1,500名を超える過去最大規模のものとなりました。学生を中心に社会人の方々、一般の方にまで広く参加頂けたことは何より開催意義があったと感じています。

当初、主催経験の無い私達は右も左も分からず、代々の資料や先生の助言を頼りに手探りで進み始めました。事前準備はとて大変で、コロナの再流行、zoom配信の苦勞、設営や役割に不安する暇もないまま時は流れ、いざ当日。16時という早い開場時間ながら人は集まり、30分後には書籍・サイン会ブースは長蛇の列となっていました。スタッフ学生達ははてんでこ舞い、私も会場をバタバタとして、代表挨拶で壇上へ上



がった時には既にげっそりしていました。

安藤先生のお話は、私達が忘れていたワクワクの大切さや、いつまでも青春を過さし続けることといった熱いメッセージからユーモアを交えた話まで、あっという間の時間でした。しかしどれもが参加された皆さんの心に強く残ったと思います。

私達にとっても、これだけの大きな講演

会を成功させたこと、安藤忠雄先生をお呼びできたことは大変貴重な経験となりました。今回の講演会を糧に、皆さんがいつまでも青春を駆けられるよう心より願っています。

**岩淵 蓮也**

plustic代表・愛知工業大学 安井秀夫研究室

本講演では、住吉の長屋や兵庫県立美術館、こども本の森など、安藤先生が行ってきた仕事やそれらにまつわる裏話を通じて、安藤先生が今の学生たちに伝えたいことを語っていただいた。どのお話もインパクトがあり、時にはユーモアを交えて語ら

れ、とても引きこまれる講演だった。

その中でも、「みんなは青いリンゴである」という、安藤先生が講演の中で繰り返したこの言葉は多くの聴講者の心に残っただろう。多くの可能性が広がっている現代において、自らの意思で動いていくこと

を安藤先生は学生に期待しているのだ。勇気と希望、そして自由と強引さを持ちながら、各々に秘める可能性を信じて新しいことに取り組んでいく。そういった“青いリンゴの精神”を持った人が日本を変え、世界を変えていくのだ。そういう思いが、安藤先生の生き様からひしひしと伝わってきた。

私も今後社会人として働く中で、様々な課題に直面するだろう。そして自分の思う通りにコトが運ばないことも多々あると思う。しかしそのような時でも常に勇気と希望を持って課題に取り組む、未熟な気持ちを忘れないチャレンジングな青いリンゴでありたい。

**内海 賢人**

名古屋大学 恒川和久研究室



## JIA 愛知後援「ヘリテージマネジメント」勉強会報告

2022年10月24日、愛知県産業労働センター「ウインクあいち」にて、愛知住まい・まちづくりコンサルタント協議会10月交流会「ヘリテージマネジメント～地域を変える文化遺産の活かし方～」の勉強会が開催された。オンラインでも参加可能で、合計40名程参加があった。私

は、同協議会の運営委員も務めており、以前からお世話になっている文化と地域デザイン研究所代表の松本茂章先生の最新著作である『ヘリテージマネジメント』について語ってもらおうと企画したものである。「文化遺産経営」には、建築士が重要な役割を担っていることはもち

ろんであるが、多様な人材の協力が必要で、総合的なネットワークの構築が急務であり、文化遺産経営人材の育成が今日的課題であると指摘があった。英米では、大学等での教育も進んでいて、勉強することで仕事として職を得ることもできるが、日本では、勉強が就職に直結しないことから、教育も進まないという現状があるようだ。建築の専門性を持ちながら地域社会での調整役も果たし、魅力的なまちづくりに貢献しようという人材を育成するならば、私たちJIAが取り組むべき課題の一つだと改めて感じた。



会場の様子



『ヘリテージマネジメント』表紙



川本 直義 (JIA愛知)  
伊藤建築設計事務所

## 天使の森植樹祭

NPO法人アースワーカーエナジー(代表小原淳氏)が実行する「天使の森100年プロジェクト」は、生態系の中の一部である人と自然の在り方という原点から、森林の再生・里山の暮らし・地域循環型産業を考え、実現に貢献していくことを目的とし、また未来につながる子ども達に自然と人のあるべき関係を知るきっかけとなるよう、2010年より活動しています。

11月3日、今回で8回目となる「天使の森植樹祭」が開催されました。毎年秋に開催され、山を分けし段階的に育った広葉樹の苗木を植樹しています。山頂からは海が望め、水源地と海の関係性を意識しながら、生活の中で使用する水の川上の環境を変えることの大切さを学びます。昨年80名程の参加者が、本年は130名



となり、小学生から続けて参加している学生や、世の中に自然環境を考える意識が高まりつつあるのと相まって、有志が増えていっています。1回目に植樹された広葉樹は3Mを越え、一面を覆うようになりました。植樹祭の後は、山頂にてそれぞれの活動を共有することで、さらに有志の輪は広がります。

2015年10月にJIAとして初めて「天使の森」を訪れ、以降植栽祭に参加してきたなかで、2021年4月には「持ち込まない、持ち出さない」(現地資材の活用と廃棄物の現地処理)を元に、一般、学生参加



にて山頂に「みんなのトイレ」を製作しました。完成当時より周囲には植物が育ち、自然の環境に晒され、より地に馴染んでいました。植樹祭の参加者からも感想をいただき、改善していければと思います。

自然と対峙し、ひとつの目標に向かって協力し合い、人の繋がりと活動を持続することの大切さをあらためて感じる機会となりました。目標としている「環境学習公園」は完成に近づきつつあります。



西村 和哉 (JIA愛知)  
h+de-sign/architect

## Dedalo Minosse International Prize

皆さん、上記の建築賞について知っていますでしょうか？

この建築賞は、2年に一度イタリアのヴィツェンツァで行われ、「優れた建築には良き発注者と素晴らしい建築家の双方の存在が必要である」という理念のもと、選ばれた作品には建築家だけでなく発注者にも賞が授与されるという大変名誉ある賞です。

この度、TSCアーキテクトで設計させていただいた「たけなか外科内科こどもクリニック」が「デダロ・ミノッセ国際建築賞」審査員賞を頂き、まだコロナ禍ではありますが思い切ってイタリアへ出かけてきました。

世界遺産の建築家パラディオのテアトロオリニコでの表彰式・バジリカでの展示会は一生の思い出になると共に



世界から集まった建築家との交流も刺激的でとても楽しい時間を過ごせました。

これからも真摯に個人個人のクライアントに向き合いながら建築の持っている可能性を拡げ普遍性を獲得できる様な

建築を設計出来るよう努めていきたいと  
思います。

田中 義彰(JIA愛知)  
TSCアーキテクト



## 「趣味は？」と聞かれても

「趣味は？」と聞かれるといつも困る。多くのひとは「ゴルフ」とか「登山」とか、この業界にいるとさりと「仕事が趣味」という人までいるが、特に趣味と言えるものがない。ゴルフも3回初めて3回辞めた。コースを回るといつも悪天候で下手くそにとってはただの我慢大会でしかない。



採れたて野菜

週末にやるのが趣味というなら「畑で野菜づくり」だが、周りの畑で農作業するおじさん達の足元にも及ばない。土いじりは多少健康に良いとは思うが。。

他には？と聞かれると、1~2ヶ月に1度集まる

愛車のオーナーズクラブだろうか。私自身同じメーカーの車に40年以上乗っており現在は6台目である。同じメーカーの貴重なプレミアムカーを30台以上保有する会長をはじめ、名車と言われる車を何台も保有する強者から、何十年も同じ車を作り続ける愛好家まで、様々なメンバーとの車談義、ドライブと会食の時間がそうなのかも知れないが、周りの



クラブの集い

メンバーに比べるとやはりそこまでではなく。。

趣味のない老後は辛いと聞く。もうすぐシニア。早く趣味を見つけなければ。

富田 彰次(JIA愛知)  
日建設計



# シンポジウム「知的生産者の公共調達の方法整備」レポート

2022年11月15日、公開シンポジウム

「『知的生産者の公共調達の方法整備』—知的生産者の公共調達に関する理念法(新法)の制定—」が、オンラインにて開催された。



## 価格競争による評価から質的な評価へ

シンポジウムの主催者は、わが国の知的生産に関わるJIAや日本建築学会等を含む19の学協会による「知的生産者の公共調達に関する法整備連絡協議会」である。連絡協議会委員長の仙田満・東京工業大学名誉教授の挨拶では、対価の価格競争による評価を原則としている日本の公共調達における知的生産者の選定を、質的な評価による原則に改める必要がある。そのために、価格評価の原則を規定している、会計法・地方自治法の改正を目指すことが、連絡協議会やこのシンポジウムの目的であるとの表明がなされた。2017年日本学術会議にて開催された第1回公開シンポジウムから議論を重ね、自民党知的財産戦略調査会・知的創造価値インフラ推進小委員会や関係省庁等への働きかけを行ってきた経緯が述べられた。

## 会計法・地方自治法改正の必要性

福井秀夫・政策研究大学院教授は、国や自治体における設計者選定における課題として、職員のインセンティブも、良いデザインによって地域価値を高めることより、批判が生じないよう無難に法的手続きをこなすことの方が大きいことなどを挙げられた。また、気概ある職員の尽力によって、魅力的なプロポーザルが実施される例も増えているが、担当者(あるいは首長)が変われば仕組みは継続しない。質的な評価によって選定することのインセンティブ(価格評価選定の

ディスインセンティブ)を与えることは、会計法・地方自治法改正による原則の転換によってしか実現できない、という強いメッセージが述べられた。

## 学校施設の設計者選定プロポーザルの推奨とその効果

連絡協議会の活動や自民党調査会からの提言の成果として、2021年8月、総務省、文科省、国交省の3省は合同通知として、全国の自治体に対して学校施設の設計者選定でプロポーザル方式などの適切な活用を要請している。この効果はまだ見えないが、千葉大学の鈴木弘樹准教授からは、過去5年の小学校施設発注者に対するアンケート調査結果について報告がなされた。プロポ方式を採用した自治体では「発注者の対応」「設計過程」といった項目での満足度が高く、ほとんどの設問でプロポ方式の方が価格競争方式より評価が高い結果となっている。当然の結果に思えるが、一連の活動を後押しする貴重な報告である。

## 知的生産者選定支援機構の活動

一方、多くの自治体では、限られた予算のなかで知の競争を促すプロポやコンペのような仕組みを運用する知恵や人力が不足している。そこで、2020年11月に自治体を支援するために設立されたのが知的生産者選定支援機構である。その初めての支援案件として、2022年夏、長野県佐久市こども・子育て支援施設のプロポーザルコンペ

が実施された。参加資格の制限を低くして、公開性、透明性の高い審査が実施された結果、多くの応募を受け、質の高い提案が選出された。初期段階からの支援でなく企画内容に踏み込めなかったことや、支援に対する報酬など課題はあるものの、今後、他自治体へも繋がっていくことが期待される。

## 知的生産者の質的評価による選定が国の創造力を高める?

シンポジウムの後半は、会場からの意見表明や質疑応答がなされ、ランドスケープコンサルタンツ協会や日本グラフィックデザイン協会などからも、デザイナー選定についての日本の遅れや、プロポやコンペの運用の適切性などについての指摘がなされた。JIAは、この連絡協議会や支援機構の中心的担い手である。一方、多くのJIA会員は、設計者選定の問題は認識していても、「知的生産者の公共調達」に対する問題意識はないであろう。仙田委員長らの活動は、法整備による根本問題の解決という目標を掲げている。建築家だけでなく多くの知的生産者が産む創造的な仕事が、知的財産の活用やイノベーション創出という国の大きな方向性に寄与することにまで視野を広げ、ロビー活動も展開している。個人的にも、プロポやコンペによる優れた建築の創出が地域の価値を高めることを発注者に広く認知いただき、成功案件を積み重ね、その共有を進めていきたい。



恒川 和久 (JIA愛知)

名古屋大学大学院工学研究科・教授

# 新年あけましておめでとうございます 2023年

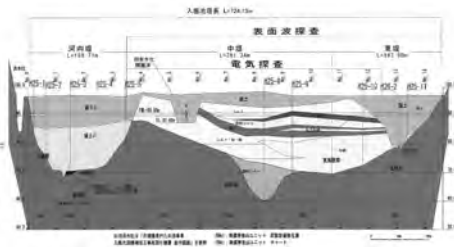
(静岡・愛知・岐阜・三重地域会 五十音順)

<p>(同)石橋剛設計事務所</p> <p>代表社員 石橋 剛</p> <p>〒410-2114 伊豆の国市南條1391-9 TEL:050-3786-1484 FAX:050-3730-5082</p>	<p>(有)聖建築設計事務所</p>  <p>代表取締役 大瀧 正也</p> <p>〒424-0923 静岡市清水区幸町10-38 TEL:054-334-2654 FAX:054-334-6468</p>	<p>(株)高橋茂弥建築設計事務所</p>  <p>常務取締役 大橋 康孝</p> <p>〒420-0847 静岡市葵区西千代田町 29-30 TEL:054-246-2731 FAX:054-247-0113</p>
<p>アール・アンド・エス 設計工房</p> <p>所長 谷村 茂</p> <p>〒464-0046 名古屋市中区千種区城山新町2-40-1 TEL:052-761-8315 FAX:052-753-9993</p>	<p>(株)伊藤建築設計事務所</p> <p>取締役会長 森口 雅文 代表取締役社長 小田 義彦</p> <p>〒460-0002 名古屋市中区丸の内1-15-15 桜通ビル TEL:052-222-8611 FAX:052-222-1971</p>	<p>(株)岩崎設計事務所</p> <p>代表取締役 岩崎 英一郎</p> <p>〒460-0002 名古屋市中区丸の内1-14-24 TEL:052-231-8787 FAX:052-231-8827</p>
<p>(株)城戸武男建築事務所</p> <p>代表取締役 城戸 康近</p> <p>〒460-0002 名古屋市中区丸の内2-11-23 富士和ビル2F TEL:052-231-5451 FAX:052-231-5450</p>	<p>(株)黒川建築事務所</p> <p>代表取締役 黒川 喜洋彦</p> <p>〒460-0002 名古屋市中区丸の内1-15-9 スガキコ第2ビル2F TEL:052-203-0281 FAX:052-203-1884</p>	<p>(株)三和建築事務所</p> <p>取締役社長 見寺 昭彦</p> <p>〒455-0015 名古屋市中区港4-5-5 TEL:052-661-2211 FAX:052-661-2247</p>
<p>(株)中建設計</p> <p>代表取締役社長 石田 壽</p> <p>〒460-0008 名古屋市中区栄2-2-12 NUP伏見ビル 5F TEL:052-222-7850 FAX:052-222-7856</p>	<p>一級建築士事務所 デザイン スズキ</p>  <p>鈴木 利明</p> <p>〒440-0012 豊橋市東小鷹野4-4-8 TEL:0532-61-4245 FAX:0532-61-4215</p>	<p>森建築設計室</p>  <p>森 哲哉</p> <p>〒468-0007 名古屋市中区天白区植田本町2-812-1 TEL:052-807-3205 FAX:052-807-3206</p>
<p>(株)ヤスウラ設計</p>  <p>代表取締役 水野 豊秋</p> <p>〒460-0007 名古屋市中区新栄2-35-6 TEL:052-241-7211 FAX:052-241-7333</p>	<p>(株)ワークキューブ</p> <p>桑原 雅明 吉元 学 平野 恵津泰</p> <p>〒460-0024 名古屋市中区正木1-13-14 TEL:052-265-8412 FAX:052-265-8402</p>	<p>内田建築設計事務所</p> <p>内田 実成</p> <p>〒501-0514 揖斐郡大野町西方北野口791 TEL:0585-34-3508 FAX:0585-34-3509</p>
<p>清水設計事務所</p> <p>代表 清水 一男</p> <p>〒514-0004 津市栄町1-903 TEL:059-228-2404 FAX:059-227-2268</p>	<p>日新設計(株)</p>  <p>代表取締役 出口 基樹</p> <p>〒514-0038 津市西古河町20-18 TEL:059-227-7421 FAX:059-225-7854</p>	<p>(株)森本建築事務所</p> <p>代表取締役 森本 雅史</p> <p>〒518-0623 名張市桔梗が丘3番町2街区68-4 TEL:0595-65-2638 FAX:0595-66-2639</p>
<p>TOTO(株)</p> <p>上席執行役員 中部支社長 伊藤 竜一</p> <p>〒450-6412 名古屋市中村区名駅3-28-12 大名古屋ビルディング12F TEL:052-308-4718 FAX:052-308-5492</p>	<p>(株)ピアレックス・テクノロジーズ</p> <p>代表取締役 廣瀬 直輝</p> <p>〒595-0016 大阪府東大阪市南町4-14 TEL:0725-22-5361 FAX:0725-22-5363</p>	

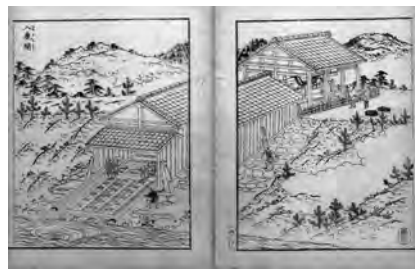




航空写真(入鹿池耐震性調査結果報告より)



堤体地質横断面図(入鹿池耐震性調査結果報告より)



入鹿の枋(尾張名所図会より)

入鹿池は1633年に築造された貯水量15,187㎡と全国最大級規模の農業用ため池です。築造後は、決壊して1,000余名が死亡した1868年の「入鹿池切れ」の大災害、1968年には堤体の地滑りなど幾多の災害と復旧を経て今に至っています。

築造の経緯は、当時この地域は高台のため村々の水争いが絶えず、その対策として入鹿六人衆が入鹿村160戸を水没させてため池を造り新田開発をおこないました。人力による工事ですから川の締め切りが難航、河内国から堤防造りの名人「甚九郎」を招き「棚架(たなづき)工法」を用いて完成に至りました。この工法は、先ず川の締め切り場所が狭くなるように土を盛り上げ、次に狭くした場所に松の木で仮橋を渡します。仮橋の上に油を注ぎ松葉と枯れ枝を敷き込みその上に土を盛り、最後に仮橋を燃やし盛り土を落下させて川を堰き止めました。長さ724.1mの堤体は三つの構成で、川の締め切り場所の右岸部は功をたたえ河内堤と呼び、中

央部が中堤、左岸部が東堤です。

平成26年入鹿池耐震調査では大規模地震に対して耐震性能を満たしているという報告があり、その資料の地質横断面図を見ると、河内堤の盛土が旧川底まで28mと最も深く、中堤は旧地盤が高いため盛土は浅く、東堤は盛土が18mであることがわかります。

江戸時代後期の「尾張名所図会」には「入鹿大池」の全景とともに「入鹿枋」と呼ばれる水門が描かれています。当時の水門は木造で堤の中ほどから上に小屋があり、堤に沿って水中まで13の立樋が設けられています。その木製の蓋を小屋内の轆轤で開閉して堤内に埋められた根樋に水を流す仕掛けで、図会には「世人無双の壮



東堤の枋跡にある現在の枋(水門)

観」「国中第一の大枋なり」と紹介されています。

平成27年10月には「世界かんがい施設遺産」にアースダムとして登録されました。(現代では高さ15m以上のものをダム、満たないものを堰堤と呼ぶ。)



#### 【概要】

所在地：愛知県犬山市秋下 喜六屋敷他

年代：1633年 河内堤築造  
1868年 入鹿池切れ(河内堤決壊)  
1879年 河内堤復旧工事完成  
1991年 県営防災ダム事業入鹿地区完了  
2001年 新取水塔完成

参考資料：「尾張名所図会 後編六」

「入鹿池耐震性調査結果」平成27年3月入鹿池耐震性検証委員会  
「入鹿用水」入鹿用水土地改良区



野々川 光昭 (JIA 愛知)  
オウ環境設計事務所

## 編集後記

●三重地域会の空き家再生に取り組む建築探訪は興味深く読ませていただきました。地区の保存活用は、

空き家の再生とまちづくりに深く係わり次世代を担ってゆく地道で重要な景観づくりを実践されているエネルギーを感じました。そしてこのような基盤には、文化遺産経営人材の育成が重要な課題となるレポート「ヘリテージマネジメント勉強会」(愛知地域会)も見逃せないテーマであると感じました。建築の専門性を持ち合わせ、まちづくりの調整役を育成する人材づくりはJIAの活動にふさわしく思います。名古屋大学で行われた、山本理顕の名古屋造形大学の建築講演会では、街に開かれた大学、芸術の他者への共感の必要性など、シンプルでその透明性が新しい大学のあり方となり、芸術教育の方向性を示され

た教育機関であると感じました。やはり建築のあるべき姿は、環境と共有し街に溶け込む建築家の姿勢こそ不可欠であると痛感しました。

(江川 静男)

●機関紙「ARCHITECT」が創刊されたのは新日本建築家協会として再出発した1987年の翌年のこと。今号まで様々な困難を乗り越えてこの412号があります。地域会機関紙から支部の機関紙へ、運営費削減の一環としてのページ数の見直し。多くの編集者の努力で機関誌としての情報の迅速な伝達や会員であることのアイデンティティー確立につながる一助となってきたのではと感じています。加えて会員内外の方からの執筆が刺激的な彩りを加えて全国のJIA支部の中でも特徴のある機関紙へと変身しているのではないのでしょうか? 今号では、辻孝孝氏による連載「Morinos」、会員横関浩氏による「BIM」、そして役員諸氏の新年を迎えるの所信表明。さあ建

築家大会東海大会も11月に予定されています。会員の皆さんの今年1年の躍進の年を祈念しつつ、本年もどうぞよろしくお祈りします。

(黒川 喜洋彦)

## ARCHITECT

第412号

発行日 2023.1.1 (毎月1回発行)

定価 380円(税込み)

発行責任者 大瀧正也

編集責任者 恒川和久

編集 東海支部会報委員会  
愛知地域会プリテン委員会  
株式会社イヅミ内

ARCHITECT 編集部

岡崎市明大寺町荒井10番地

TEL (0564)21-2657 FAX 26-1792

発行所 (公社)日本建築家協会東海支部

名古屋市中区栄4-3-26 昭和ビル

TEL (052)263-4636 FAX 251-8495

E-Mail : shibu@jia-tokai.org

http : //www.jia-tokai.org/

# 山本理顕氏講演会レポート

2022年11月21日、名古屋大学オークマホールにて山本理顕氏の講演会が開催された。「開かれた大学を目指して名古屋造形大学の建築」と題し、昨年竣工した名古屋造形大学新校舎を中心に、地域社会へ開く大学のあり方、教育システムと空間の関係、施工者の重要性等について話された。

## なぜ会場が名大なのか

本来ならば名古屋造形大学についての講演は名古屋造形大学の講堂が最高の舞台であろう。それがなぜ名古屋大学で行われることになったのか。講演前に予定されていた名古屋造形大学の見学会も急遽中止になった。その経緯について率直な説明があった。名古屋競馬場跡地利用をめぐる問題、日本のプロポーザルコンペの形骸化など市民をないがしろにした行政について懸念が呈され、「東海まちづくりフォーラム」や書籍「都市美」による議論の発信が紹介された。

## プロセスを透明化し、街に開く

まず校舎移転の経緯について、設計や施工者選定のプロセスを徹底的に透明化することの重要性を説いた。北に団地、東に柳



原商店街、南に愛知学院大学、西に名城公園という立地に対し、近隣住民に開き、街のシンボルとなることが目指された。

名城公園駅の真上にあることは好立地であるが、設計や施工に困難を伴う。5m下にある地下鉄駅の上には大きな荷重をかけられない。その条件を逆手に取って、アートストリートという道を建物内に南北に貫いた。そこには見世と名付けた軽量の小屋が並び、学生や教員の作品が展示・販売される。敷地に塀をつくらず入りやすい開放的な空間をつくり、近隣住民と交流しやすいプログラムも用意されている。

## 他者に向けた芸術

大学の空間を新しくするにあたり教育システムも刷新し、これまでの9つのコースを5つの領域に再編成した。コースはスキルを学ぶ専門性や商品分類としてはわかりやすいが、何のために誰のために作るのかという受け取り手を意識することが重要と考え、新たな領域に分けられた。芸術は内面の追求のみではなく、他者の共感が必要である。

## シンプルで多様な建築

校舎はアートストリートを挟んで、東にアリーナ棟とホール棟が、西にライブラリー棟とギャラリー棟が2棟ずつ並ぶ。1階のギャラリーは外周の格子壁裏にサッシが入っていないオープンエアとなっており、温度管理された場とは違う環境での創作行為が期待される。2階にはレクチャールームや吹抜上部となっており、3階に安全面を考慮した工房が配される。4階はアートストリートをまたぐ約90m角の一室空間となっている。ここが学生や教員の居場所となるスタジオである。東西方向にアートプラザというストリート空間が中心に位置し、縦動線とつながり、プレゼンボックスが面する。その周囲には5つすべての領域がワンルームに配され、領域内や領域間の交流が喚起される。5つの領域は○=△+□という最もシンプル



なサインによって場所が示されている。教員の居場所も閉じられてなく、教員の位置は顔写真を印刷した旗をテーブルに差すことで示している。

## 魂を込めた施工

最後に施工者選定プロセスや施工上の工夫について話があった。選定段階では見積りだけでなく、施工方法についての提案書も求めた。特にアートストリートには重機を設置できないため、各社さまざまな施工方法を提案した。多くのモックアップも製作され、鉄板と一体となったコンクリートの格子壁は破壊試験が行われ、十分な強度を確認した上で施工された。

何より監督を始めとして職人たちが芸術作品をともにつくっているという高い意識をもち工事が行われた。

## 建築家の責任と自治空間としての大学

会場やオンラインでの聴講者からは多くの質疑があった。

大空間で個人の居場所をどう確保するか、多くの芸術系教員の賛同の取り方、セキュリティ等について質疑があったが、2つの言葉が印象に残った。ひとつは「建築家がすべての責任を負う」こと。現在の日本では多くのサポートや説明書類のもとで設計がなされるが、それは建築家が信用されていない証である。もう一つは「大学は教員と学生の自治空間であるべき」。大学をどう運営し、地域に開くかは教員と学生によって決められるべきであり、経済原則のみに基づいた経営者が行うべきではない。

私も設計を生業とし大学に勤めるものとして、大変考えさせられる講演であった。

## 諸江 一紀

諸江一紀建築設計事務所  
愛知淑徳大学准教授

